

- 1、「捨てる」は新共同訳(新約)では56回出てきます。驚くなかれ原語は21語あります。今日のテキストには、27と29の2回です。〈aphieemiアフィエミー「解き放つ、去らせる、捨てる」〉。因に、「自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」(マコ8:34)は〈aparmenomai アパルメノナイ否認する、自分を忘れる、無視する〉という、これはかなり強い意味です。讚美歌の「主は命を惜しまず捨て」(21-513-1&2)「かくもわがためにさかえをすつ、われは主のためになにをすてし」(54-332-2)は「イエスの十字架の死」を、神学的に「イエス自身が身を捨てる」という意味で用いています。聖書では「捨てること」はそれ自身が目的ではなく、新しい関係に入る、または関係を創る意味です。「捨てる!」技術 2005宝島社新書、辰巳 渚著は、「捨てること」は物と自己との関わり方の意識化、関係性を創ること。関わりの中で、自分が活かされるだ、とっています。聖書の「捨てる」は人との関係性の創造です。
- 2、「捨てる」ことをしないで「永遠の命」を得たいという、大変虫のいい「金持ちの青年」は、自己完結的、自分本位の人物です。イエスは持ち物売って、貧しい人々に施せと命じます。そうすれば天に宝を積むことになる。他者(神と人)との関係に無知な人への呼び掛けです。マタイは、富の問題、所有の問題をずっと語っています。「宝は天に積みなさい」(6:19-20)。「天」というのは「開かれている関係」ということです。そして「ラクダが針の穴を通る」難しさに続きます。
- 3、このような流れの中で、ペトロの自負が登場します。「なにもかも捨ててイエスに従って来た」(27節、4章20節参照)と言います。マタイ福音書は、ペトロを大変大切に扱っている書物です(16章の「ペトロの信仰告白」)。ペトロの発言は額面では肯定されています。「わたしに従ってきたのだから、……十二部族を治める」。そして、「私の名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、畑……を捨てた者は皆、百倍もの報い(豊かな関係)を受け、永遠の命を受け継ぐ」と。
- 4、ところが、問題は、最後に付加されている一節です。30節の「しかし」でどんでんがえしあります。ここが、このテキストの深みです。ペトロの自負は「先にいる多くの者が後になり」で逆転します。この逆転の宣言は、26節の、「人間に出来ることではないが、神は何でも出来る」という神の可能性へと価値尺度の転換の促しをしています。そこに微塵も気が付いていないのがペトロの盲点です。私たち自身も例外なく「このペトロ」です。ここにテキストの問い掛けがあります。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」(16:24)。「主は命を捨て」という、関係を想起する中で、開かれた関係へと、息づくことを許されています。ここには、命の関係の、逆説性、成熟性がよくでています。「自分を捨てること」に熟達して、少しでもイエスに近づくことを祈り求めて参りたいと存じます。